

< 研究ノート > エヴァンキ族の民話の特徴について

著者	朝 格査
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	17
ページ	171-174
発行年	2000-03-30
その他のタイトル	<Notes>Some Characteristics of Ewenki People's Folktales
URL	http://hdl.handle.net/2241/10330

エヴェンキ族の民話の特徴について

朝格查(チョウケチャ)※

現在まで、エヴェンキ民話を収集して、一冊の書物を作り上げたのが呂光天編著の『エヴェンキ民間故事』と朝克等編著の『エヴェンキ民間故事選』及び馬名超等編著の『エヴェンキ族民間故事選』である。それ以外では、地域的な民話集(ドイツのディーデリヒ社の『世界の民話』の中に『シベリア民話』二巻がある。第二巻にエヴェンキの民話が入っている。)或いは、ある少数民族を研究した雑誌、撰集等に載せられているのみで、数がすくなく、しかも、それらの民話は、民族研究や民俗研究の資料として使われているのみである。エヴェンキの民話を専門の研究分野として研究している研究者はいまだにいない。エヴェンキ族の民話を研究するには、始めにエヴェンキ民話の起源、特徴、性質を見つけ、それによって、エヴェンキ族の民話をアールネ・トムソンの分類法によって分類する。その後、他の民族の民話と比較研究すべきであると思う。さもなくば、民話の研究を進めるのは困難であろう。

今回は刊行されているエヴェンキの民話に限り、その民話の特徴について簡単に論述したい。

1) エヴェンキ族の民話の古来性

エヴェンキ族は長い歴史を持ち、しかも、長い原始的な狩猟生活を経て、近代文明にはいるのは他の民族より遅れていた。しかも、無文字であるため、民族の歴史などの文化遺

産は民話の形で多く残されている。これらの民話は原始生活のさまざまな局面を反映したもので、現在までそれらは伝えられている。例えば、次のような伝説がある。

昔むかし、熊は人間だった。人間のように立って歩くことができた。ある日、熊が棒で人間を殺し、神から罰を受け、親指を切られ、神が熊に4つの足で歩けと命じ、これより熊が人間から獣になった。熊は人間だったため、今でも両足で歩くことができる。

熊の伝説はエヴェンキ族の原始時代の狩猟活動を表したものであり、エヴェンキ族は狩猟活動で熊のような恐ろしいものに原始的な狩猟道具で立ちまわくことは困難で、それで、熊の立ち歩きや両手で物をつかむのを見て、説明できず、このような民話を創ったのであろう。このほかに、『虹の伝説』、『イダカン』、『シャーマンと神亀の伝説』、『人類の起源の伝説』など、昔から伝えられている民話が多くある。

2) シャーマニズムについての民話

エヴェンキ族は原始的な生活から脱却して三百年も経っていないため、長い間シャーマニズムがエヴェンキ族の精神を支配するものとして存在してきた。風、雷、雨、雪等の自然現象や自分たちが解けないもの、すなわち、吉、凶、生、死、病、夢などがシャーマンに深くかかわった。大部分のエヴェンキ人にとっていまだシャーマニズムは生活の重要な一部となっている。シャーマニズムに関連した民話が代々に伝えられ、民話の中で最も重

※東北大学大学院国際文化研究科

国際文化交流論言語文化交流論講座修士
課程研究生

要な役割を担う。

これらの民話には、エヴェンキ族の生産活動や社会制度の諸側面が反映されている。例えば、民族の起源の描写は、“シャーマンが現れる前に人間と動物は同じ所に住んでおり、草を食べ、住むところは小丘しかなかった。シャーマンが現れ、世界が広くなり、そして、人間と動物が分かれ、最初の人類ができた。太陽が昇るところに一人の老婆がいた。老婆は巨人で巨乳を持ち、人間の子が老婆の乳を吸い、人間になる。すなわち老婆は創世のシャーマンである”(エヴェンキ族民間文学概論 59 頁)。

このような民話はエヴェンキ族の各部族にある。代表的なものは、ツングスエヴェンキの『イワンシャーマンの伝説』、ソロンエヴェンキの『ニサンシャーマンの伝説』、ヤクートエヴェンキの『バインドロンシャーマンの伝説』である。このほかに、時代によってシャーマニズムの伝説もさまざまで、ほとんどエヴェンキ族の風俗や生産活動を表したものである。シャーマニズム関係の民話は刊行されている民話の四割を越える。

3) トーテムについての民話

エヴェンキの民話の中で、シャーマニズムに関する民話以外、トーテムの伝説もたくさん語られている。狩猟活動はエヴェンキ族の生活の中で最も重要な一環として、昔からエヴェンキ族の生活を支えてきた。エヴェンキの人々が、動物は神様の恵みものだと思っており、それによって、動物を自分たちの偶像として崇拝したのであろう。エヴェンキ族のトーテムは、部族によって様々だが(ソロンエヴェンキの蛇、ツングスの熊、ヤクートのトナカイなど)ほとんど動物であり、それ以外に蛙、鳥、タカなどもある。エヴェンキ族の人々はトーテムを祭る活動で、トーテムに関する伝説をたくさん作り上げた。トーテムに関する民話の中で、最も広く伝えられ

ている民話は、蛇の伝説である。

天と地に間にまだ人間はおらず、一人の長いおさげのエヴェンキ人が神蛇に出会った。この神蛇はバイカル湖の河に住んでいた。この神蛇は天から下り、角が二つあり、スヴォコ神といった。スヴォコ神はバイカル湖であの長いおさげのエヴェンキ人と一緒に住み、たくさんの子供をつくって、母になった。けれども、人間と話すことができず、スヴォコ神の伝言が全てシャーマンから伝えられ、エヴェンキ人が全てスヴォコ神の指示で活動を行った。スヴォコ神はエヴェンキ族の先祖だった。

この伝説から、エヴェンキ族はバイカル湖周辺で活動を行ったことを垣間みることができる。これはロシアの研究者がバイカル湖で発見した銅石時代の文物をエヴェンキ族の文物であることと断定した事実と、対応している(『バイカル湖地区和黑龍江流域各民族与中原的關係史』1 頁)。このようなトーテムを語った民話として、また『人と熊の分家』『トナカイと太陽』『鳥』『蛇と蛙』等を挙げることができる。

4) 動物についての民話

エヴェンキ族には、狩猟のみを生業としている狩猟民もいれば、狩猟と並んで牧畜にも従事している牧畜民もいる。牧畜民のエヴェンキ族の場合でも、牧畜に関わった歴史はそれほど古くなく、たかだか300年程度に過ぎないうえ、現在でも狩猟から完全に離れたとはいいがたい。つまりエヴェンキ族は、伝統的な狩猟経済から牧畜への完全な移行をまだ行っていないのである。すなわち、エヴェンキ人は今までずっと、トナカイ、熊、鹿、ノロ、猪等の野生動物を経済生活の基盤として暮らしてきたわけである。このため、エヴェンキ族の民話には、これらの野生動物に関連する表現が発達している。『狐の故事』はこの中の一つである。この伝説はある老獵人と狐

のことを語る。

ある日、老獵人が帰る途中で子狐を拾い、抱き帰って飼った。狐が大きくなり、老獵人から離れず、老獵人と一緒に暮らしていった。ある日、老獵人は干し肉と狐と一緒にトナカイの上に載せ、家を引っ越した。途中、老獵人が狐に“家をどこにつくればいい”とたずねると、“袋のうえがいい”と狐が答えた。何時間も歩いたころ、老獵人が“どこがいい”とたずねると、“真ん中がいい”と狐は返事した。夕焼けになるころ、老獵人がもう一回聞いた“ここが良いだろう”とたずねると、“底になりました”と狐が答えた。翌日、老獵人がご飯をつくろうとすると、食べ物全てなくなっており、干し肉の袋の中には狐の前歯が二本見つかっただけで、食べ物が狐に食べられたことが判明した。それから、老獵人が狐を追いかけて、自分の狩猟智慧で狐を捕えた。

このような民話は、『人と熊』『銀色の子牛』『金魚と狐児』『母鹿の故事』『少年と虎』『ニクの猟犬』『誠実な僕』『悪魔カバ』等が代表的で、他の民話の中にも動物関連の内容が多く見られる。

5) 狩猟に関する民話

それぞれの民族が基盤としている生活条件や生活様式は様々である。人は、自分たちの一番熟知している生活条件と生活様式に基づいて言語活動を行う。また、自分の熟知する対象の性質や特徴を利用することによって、その民族の特徴を表現できるものをつくり出す。エヴェンキ族にもこのような狩猟活動を基づいた民話が多くつくられている。代表的なものとして、『ナヴィ猟熊』『猪を狩る故事』『虎』『ニクの猟犬』などがある。このほか、ほとんどの民話に狩猟の内容が書かれている。例えば、1) 古来性の中の『イタカン』、2) シャーマニズムの中の『ニサンシャーマン』、3) 動物中の『少年と虎』と『母鹿の故事』。これは、エヴェンキ族が昔から厳しいシベリ

アの自然の中で、単一な狩猟生活を行っていたためである。しかも、他の民族との交流もほとんど行われていない。したがって、動物や狩猟など、自分たちの一番熟知している物を語るしかなかったと思う。これが他の支配民族、あるいは、文化交流が広い民族との相違点と考えられる。

6) 民話の短さについて

今手元にあるエヴェンキの民話の中で、五千文字を越える民話は、『世界の民話』（シベリア東部）の中の『狐独と太陽』、『ヘーラダン』と『エヴェンキ民間故事』の中の『興安嶺的故事』、『ウナッゲドンの故事』しかない、ほとんどの民話は千五百文字から三千文字の間である。千文字も達していない民話は、『世界の民話』（シベリア東部）の中に9話で、『黒竜江民間文学』の中で13話がある。この中に五百文字もない民話が11話もある。『太陽の子』『短い年』『風神』『ゲルトン河の伝説』『ソローンの起源』等の例を挙げることができる。これは、エヴェンキ族は無文字であるため、自分の歴史や文化などの物を文字で記載することができず、代わりに民話や歌のかたちで代々伝えてきた。従って、エヴェンキ族の人々は短くて伝えやすい民話をたくさん創ったであろう。これも無文字であるエヴェンキ族の民話の一つの特徴であると考えられる。

7) 民話に歌が多く書かれている

エヴェンキ族は無文字であるため、民話のかたち或いは歌のかたちで民族そのものを伝えてきた。その中に挿入された歌、或いは、物語詩としての民話がすくなくない。『母鹿の故事』の中の歌が一番代表的である。この歌はこのような謡っている。

森の中に一人がいる
彼の頭のうえに二つの目がある
足がまるくて
あの人は私を矢で射た

私の娘よ
早く乳を吸って
体にささった矢を抜かないで
抜かれれば私は死ぬ
.....

このような歌が書かれている民話は、刊行されている109話中に23話もあり、約20パーセントを示す。民話の中に歌が多く含まれていることも、エヴェンキ民話の一つの特徴であると考えられる。

参考文献

『エヴェンキ族研究文集』 第二集(上,下) 内
モンゴル自治区エヴェンキ族研究会
1991年

『エヴェンキ民間故事』 呂光天編 内モンゴ
ル人民出版社 1984年

『エヴェンキ族社会歴史調査』 内モンゴル自
治区編集組 1986年

『シベリア民話集』 斉藤君子編訳 岩波文庫
1989年

「エヴェンキ族民間文学概論」『求是学刊』
1981年1期

『黒竜江沿岸ツングス満語民族エヴェンキ人
与オロチョン人的自然崇拜』『黒竜江
民族』 1990年1期

『黒竜江民間文学』 中国民間文芸研究会黒竜
江分会 1983年

『世界の民話』(シベリア東部) 小沢俊夫編訳
1985年

『エヴェンキ民間故事選』 朝克等編 内モン
ゴル文化出版社 1988年9月

新刊紹介

松村嘉久著

『中国・民族の政治地理』

本書は地理学から見た中国の民族政策、自治
区自治についての研究である。著者の松村嘉久
氏の大阪市立大学へ提出された博士論文がもと
になっている。文化人類学や民俗学からの視点
には政治の視点がかけられており、他方で政治学
においては中央の権力分析が主流であるため普通
の人々の生活にまで視点が下りてこなかったの
に対して、その空隙をうめていく好著である。特
に雲南、貴州などを中心に書かれていて、新疆
やチベットとはまた違った中国の地方政治を知
ることができる。この地域に多い○○族○○族
○○族自治県のような、あのくどいとも思える

州や県の名称が決まっていく政治過程や、同時
並行に進んでいった民族識別とのかねあいなど
が多数の史資料をもとに立体的に描かれており、
非常に興味深い。また、インターネットのなか
の中国民族の分析もののような、多民族国家の
虚と実を浮き彫りにする現代的な視点も具備し
ている。政治学、地理学といわず、民族学、人
類学ならなおのこと西南中国をあつかう人には
是非読んでいただきたい最近の好著である。

(稲村 務)

A5判、1999年刊、晃洋書房2,800円